Osaka University Knowledge Archive

Title	戯曲『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』におけるリディア・ファルコンの女性への呼びかけ
Author(s)	岡本, 淳子
Citation	Estudios Hispánicos. 2020, 44, p. 41-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98049
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

戯曲『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』における リディア・ファルコンの女性への呼びかけ

岡　本　淳　子

1. はじめに

1935年、スペインのマドリードに生まれたリディア・ファルコン（Lidia Falcón）は作家であると同時に、弁護士、ジャーナリスト、政治家、女性解放活動家の顔を持つ。彼女はバルセロナの演劇学院で舞台芸術を学んだ後、1961年にバルセロナ大学で法学と新聞学の学位を取り、1991年にはマドリード自治大学で哲学の博士号を取得する。ファルコンが1977年に立ち上げた革命的フェミニスト組織（Organización Feminista Revolucionaria）は2年後にはスペイン・フェミニスト党（Partido Feminista de España）に発展する。彼女はこれまでに小説、戯曲、随筆、学術研究書を出版し、スペインの主要な新聞や雑誌への寄稿は数知れない。長きにわたり様々なメディアを通じて女性の地位向上のために尽力してきた。その中でも、「スペインでは20世紀になるまで女性劇作家がほとんど存在しなかった」（O'Connor, 2006, 12）ことを鑑みれば、当時の女性の置かれた状況に焦点を当てて戯曲を執筆したファルコンの演劇界における功績は大きい[1]。研究者のジョン・P・ガブリエル（John P. Gabriele）は以下のように記している。

> 政治的かつ社会を扇動する演劇の作者であるリディア・ファルコンが自身の演劇作品の中で努力していることは、社会で女性が伝統的に劣位にあることに対して男女同権主義の意識を引き起こし、政治、社会、芸

1　パトリシア・W・オコナー（Patricia W. O'Connor）は *Mujeres sobre mujeres – Teatro breve español* のイントロダクションで、20世紀の最も重要な女性劇作家としてリディア・ファルコン以外にアナ・ディオスダード（Ana Diosdado, 1938-）を挙げている（O'Connor, 2006, 13）。

術、学術のいかなる言説からも周縁に阻害されている状況から女性を救い、より優れた場所に女性を配置することである。 (Gabriele, 2002, 7)

本稿ではファルコンが1984年に発表した『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』(*¡No moleste, calle y pague, señora!*) を取り上げ、男性優位のスペイン社会がいかなる劇的手法で提示されているのかを分析する。まずは本作の主要な登場人物である3人の女性がどのように描かれているのかを考察する。次に、男性の登場人物の役割を明らかにするとともに、登場しない男たちが何を象徴するのかについても論証する。そして最後に、本作が女性たちに何を呼びかけているのかという問いに対する答えを導き出す。

2. 舞台装置による時代背景の表示

1975年にフランコが死去し、スペインの独裁制は終焉したが、独裁者がいなくなったからといってすぐに民主化が到来したわけではない。スペインが民主主義国家として機能するにはおおよそ10年の移行期を必要とした。ファルコンが本作を発表したのは1984年、スペインの民主化がようやく定着してきた時期である。本作の劇中の時間は明示されていない。しかしながら、舞台装置によってその時代を推測することができる。第一場の ト書きには、「机の上にキリスト像。壁にはアルフォンソ13世、プリモ・デ・リベーラ、フランコ、フアン・カルロス1世の肖像画」があると記されている。

アルフォンソ13世 (Alfonso XIII, 1886-1941) は出生と同時に国王となり、母親マリア・クリスティーナの摂政政治を経て、1931年まで国王の座に就いた。軍人ミゲル・プリモ・デ・リベーラ (Miguel Primo de Rivera, 1870-1930) は1923年にアルフォンソ13世の内々の承諾を得てクーデターを起こし、1930年まで軍事独裁政権を指揮することになる。1931年の地方選挙の結果、第二共和政が成立すると、アルフォンソ13世はイタリアへ亡命する。1936年にスペイン領モロッコのメリーリャで軍部がクーデターを起こし、スペイン内戦が始まる。そして内戦が終結した1939年にフランシスコ・フランコ将軍 (Francisco Franco, 1892-1975) を総統とする独裁政権が樹立される。フアン・カルロス1世 (Juan Carlos I, 1938-) はアルフォンソ13世の孫にあたる。フアン・カルロスは1948年にイタリアから追放されて

スペインに戻り、フランコの庇護の下で教育を受ける。1969年にはフランコの後継者に指名され、フランコが死去した1975年にスペイン国王となる。スペインの民主化を進めた国王として評価されているフアン・カルロス1世ではあるが、独裁者フランコが自分の後継者として教育した人物なのである。このように見ていくと、劇中の時間はフアン・カルロスが国王に就いた1975年以降であり、民主化への移行期にあるもののフランコ政権の影響がいまだ続いている頃と推測できる。また、第二場の主人公が離婚請求をするために弁護士を訪れていることから、離婚法を含む民法が発布された1981年以降であることも明らかである。したがって、おそらく本作の背景となっているのは本作が執筆された1983年とほぼ同じ頃と思って間違いないであろう。同様に第二場の「机の背後にキリスト像がかかっている。壁にはペニャフォルの聖ライムンドの肖像画」(157) という小道具によっても、カトリック信仰が重要視されたフランコ時代の影響がいまだ強いことが強調されている。

3. 舞台装置による男女の力関係

『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください!』は三場で構成されている。第一場に登場するのは夫のドメスティック・バイオレンスを訴えに警察にやっていた女性マグダと、彼女の話に耳を傾けないどころか夫のほうに同情して彼女を追い返す警部である。第二場は、夫の浮気を理由に離婚の手続きのために弁護士事務所にやってきたマルガリータが弁護士に相手にしてもらえずに気落ちして事務所を去るという話である。第三場に登場するのは、不倫関係にあった妻子持ち男性に捨てられた後、精神的に不安定になっているマリアである。彼女は予約をしておいた精神科医との面談に来るのだが、精神科医と対面式で話をすることはできず、インターフォン越しに悩みを訴える。まだ話が途中であるにもかかわらず決められた時間が来たため、一方的に電話を切られてしまう。

三場に共通しているのは、舞台装置によって女性が劣位にあることが視覚化されていることである。まず第一場のト書きを見てみよう。舞台は警察署の警部の部屋であるが、彼が座っている机は「とても高い、大袈裟なくらい高い壇の上に」(147)[2] 置いてある。「この壇と机を合わせると、その高さはちょうど彼女の顔の位置とほぼ同じである」(147) ため、警部は常にマグダ

を見下ろし、マグダが警部と目を合わせて話すためには、かなり上を向かなければならない[3]。警部とマグダの関係が彼らの位置によって戯画的といってよいほどに誇張されている。マグダが始終怯えていることとこの位置関係が原因で、彼女はほとんど常に伏し目がちに話をする。

第二場のト書きでは男女の位置は次のようになっている。

> 弁護士事務所。かなりの高さがある机。弁護士が座りやすいように机の後ろに段を置こうと思うほどである。机の前にある肘掛椅子はかなり背が低い。その肘掛椅子は小さくもあるので、マルガリータは脚を縮めて座らなければならない。(157)

弁護士の机とマルガリータが座る椅子の高さにはかなりの差があり、男性が女性を見下ろし、女性が身を小さくして男性を見上げるのである。第三場では男性は登場せず、声だけが聞こえるのであるが、主人公マリアとその声の主とを繋ぐ受話器が「とても高い位置にあり、彼女はつま先立ちにならなければ手が届かない」(165)。見えない相手さえも上位に位置しており、女性が無理な体勢を取らなければ、その相手に声を届けることさえできない。

全三場において女性が男性と比べて低い場所に配されることで男性の劣位にあることが視覚化されている。それ以外の舞台美術によっても女性に対する制限が表されていることを見て行きたい。第一場のト書きを見ると、「手すりがその壇を部屋の残りの部分から隔てている」(147) とある。警部とマグダの位置の高低差のみならず、手すりの設置により警部のいる高い壇と部屋の残りの部分が分離されていることからも、男性社会、権力側に女性が足を踏み入れることはできないことが明示されている。第二場では、マルガリータの座る肘掛椅子の背がかなり低いだけでなく、「小さくもあるので、

2　本作の翻訳は、Lidia Falcón, (1998) *¡No moleste, calle y pague, señora!,* en Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres : teatro breve español,* Madrid : Editorial Fundamentos. pp.145-169. を底本とした。本作の翻訳は拙訳であり、作品から引用する場合はページ数のみを記す。

3　2005 年に執筆された『虚偽の告訴 (*Falsas denuncias*)』で登場するのは女性の裁判官と女性の告発者であるが、この二人の女性の位置関係においてもファルコンは本作と同じ設定を用いている。「告発者の低い椅子の正面に位置する裁判官の高い場所は二人の女性の相対関係を視覚的に伝えており、裁判官が告発者を自分よりも劣ったものと認識していることを伝えている」(O'Connor, 2006, 146)。

マルガリータは脚を縮めて座らなければならない」(157)。原文では足を縮めるとなっているが、椅子が小さいのであれば、体全体を屈めて座ることになるのであろう。窮屈な体勢を余儀なくされているマルガリータの姿によって男性社会で自由を奪われている女性が表現されているのである。第三場においては、精神科医との面談はインターフォン越しで行われ、マリアは診療室に入ることさえ許されない。本作を論じるガブリエルは次のように指摘する。

> マグダとマルガリータが自分たちを抑圧する人と対面できるのに対して、マリアは男性の領域に入ることを拒否されている。しかし、彼女に対する抑圧が他の二人に対する抑圧よりも厳しくないというわけではない。 (Gabriele, 1997, 46)

マリアの場合は男性の領域から完全にシャットアウトされていることが明示されている。

以上のように作者ファルコンは舞台装置によって男女の領域の分離や明らかな上下関係を示している。

4. フランコ時代の理想の女性像

1933年、先に名前がでた独裁者ミゲル・プリモ・デ・リベーラの息子であるホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベーラ(José Antonio Primo de Rivera, 1903-1936)がファランヘ党を創設する。スペイン内戦中の1937年、反乱軍政府を指揮していたフランコがファランヘ党と王党派を合体させ新しいファランヘ党を結成し、内戦に勝利した1939年からはスペイン唯一の政党とした。ファランヘ党の創設者ホセ・アントニオの妹ピラール・プリモ・デ・リベーラ(Pilar Primo de Rivera, 1907-1991)はファランヘ党女子部のリーダーとして独裁体制下における理想の女性像の徹底に尽力した。ピラールは1953年に『よき妻の指南書』(Guía de la buena esposa)を発行し、各家庭の女性に配布した。「あなたのご主人を幸せにするための11の規則」という副題のついた指南書の中身は以下のとおりである。

1. 夕飯を準備しておきなさい。

ご主人の帰宅に間に合うように時間をかけておいしい夕飯を準備しなさい。それはあなたがご主人のことをずっと考えていたということ、何が求められているのかを気にかけているということをご主人に知ってもらう一つの方法です。ほとんどの男性は帰宅時にひどく空腹なのです。

2. 美しくしていなさい。

ご主人を生き生きと輝いて出迎えられるようにご主人の帰宅前に5分間の休息を取りなさい。化粧を直し、髪にリボンを巻き、ご主人のためにできるだけ輝きましょう。ご主人が困難な一日を送ったこと、職場の仲間としか接しなかったことを思い出しなさい。

3. 優しく、かつ知的でありなさい。

職場でのご主人の退屈な一日をより良いものにする必要があります。そのためにあなたはできる限りのことをしなければなりません。ご主人の気を晴らすことはあなたの義務の一つです。

4. 家を片付けなさい。

家はぴかぴかにしておかなければなりません。ご主人が帰ってくる直前に、家の主な場所を最後にもう一度見て回りなさい。教科書、おもちゃなどを片付けておきなさい。そして、羽ぼうきでテーブル類をきれいにしておきなさい。

5. ご主人に楽園にいるように感じてもらいなさい。

一年のうちで最も寒い数ヶ月間はご主人の帰宅前に暖炉の準備をしなければなりません。ご主人は気持ちが休まる整頓された楽園に帰ってきたと感じるでしょう。それはあなたのやる気を高めることにもなるのです。つまるところ、ご主人が快適に暮らせるように世話をすることは、あなたに途方もない個人的満足を与えることになるのです。

6. 子供たちの支度をしなさい。

子供たちの髪をとかし、手を洗ってやり、必要であれば着替えをさせなさい。子供たちはご主人の小さな宝物なので、子供たちが光り輝いている姿を見たいはずです。＊子供たちを整えるために少し時間を取りなさい。

7. できる限りうるさくしないようにしなさい。

ご主人の帰宅時間には洗濯機、乾燥機、掃除機のスイッチを切り、子供たちを静かにさせなさい。職場での辛い一日の間ずっとご主人が耐え

なければならなかった騒音のことを考えなさい。

8. 幸せでいるように努めなさい。

ご主人に満面の笑顔を贈り、ご主人を喜ばせたいというあなたの誠意を示しなさい。あなたの笑顔はご主人の日々の苦労の報いなのです。

9. ご主人の話を聴きなさい。

ご主人に話すべき重要なことがたくさんあるかもしれませんが、ご主人の帰宅後すぐにあなたが話をするのは良いタイミングではありません。まずはご主人の話を聴くのです。ご主人が話すことのほうがあなたの話よりも重要であることを覚えておきなさい。

10. ご主人の気持ちに寄り添いなさい。

ご主人が遅く帰宅しても、あなたを連れずに気晴らしに行くとしても、あるいは一晩帰ってこなくても、文句を言ってはいけません。様々な約束があるご主人の世界を理解することに努めなさい。ご主人の世界にはプレッシャーや約束事があるので、家でリラックスできることが真に必要であることを理解しなさい。

11. 不平を言わないこと。

取るに足りない問題でご主人を煩わせないように。あなたのどんな問題も、ご主人が克服しなければならない問題に比べたら瑣末なものなのです。

おまけ. ご主人にくつろいでもらいなさい。

肘掛け椅子に座ってくつろいでもらうか、部屋でちょっと横になってもらいなさい。ご主人のために温かい飲み物を用意しておきなさい。枕を整え、靴を脱がせてあげなさい。＊優しい心地よい声で話しなさい。

(Guía de la buena esposa)

よき妻、よき母であることが求められていたことがわかる。とりわけ夫が自宅で快適な時間を過ごせるようにできる限りの努力をすることが妻に求められたのである。

5. 三人の登場人物が象徴する女性像

本作に登場する女性たち、第一場のマグダ、第二場のマルガリータ、第三場のマリアがどのような人物なのかを見て行きたい。

マグダは、「中年女性で、見栄えのしない時代遅れのスーツを着て、ヒールの低い靴を履いている。いかにも安い美容室でしてもらった髪型で、洗いもので荒れた手をしている。片目は紫色に腫れ、顔には引っかき傷、片腕を包帯で吊っている。言いたい事がうまく言えず、終始いまにも泣き出しそうである」(147)。その外見から彼女があまり裕福ではなく、日々の生活に疲れており、しかも夫からひどい暴力を受けていることがわかる。彼女は夫のひどい仕打ちを警部に訴える。

> マグダ　(かなり困惑し、不安げであるが、勇気を出して力説する) ひどく痛めつけられました……。腕を折られました……。そして家から追い出されました。もう私を家に入れないと言っています。子供達がもうこれ以上邪魔しないように、施設に入れると言っています……。(151)

彼女の夫の怒りの原因は、仕事で疲れて帰宅しているのに唯一の娯楽であるサッカーの試合中継をラジオで聞くことを泣き虫のマグダと金切り声を上げて遊ぶ小さな子供たちが妨害していることである。先述した『よき妻の指南書』を参照しよう。彼女は、「見栄えのしない時代遅れのスーツを着て、ヒールの低い靴を履いている。いかにも安い美容室でしてもらった髪型で、洗いもので荒れた手をしている」(147) のであり、帰宅した夫が喜ぶように見た目をきれいにしていない。つまり、よき妻のための規則 2 に反しているのである。また、子供達がまだ小さいため金切り声をあげて遊ぶのをマグダはどうすることもできないと言っており (151)、つまり彼女は、夫が快適に暮らせるように努力せよという規則 5 と、夫が帰宅したらできる限り物音を立てないようにせよという規則 7 にも反しているのである。したがってマグダはよき妻としての務めを怠っているということになる。男性である警部からすれば、マグダの夫の怒りは当然のことであり、サッカー中継を楽しむという夫の唯一の娯楽を妻と子供たちが邪魔するということは、「皆殺しするに値する！」(151) し、夫が妻の顔を殴ったり、腕を折ったり、家から出したりすることは「何もしていないに等しい！」(151) のである。

第二場に登場するマルガリータは「若く、きちんとした身なりをし、宝石も付けている。化粧は控えめで、爪にはマニュキアを塗っているが、手は洗いもので荒れている。彼女は毅然としており、意志の強さが見てとれる」(157)。マルガリータには外見に気を使う余裕もあり、第一場のおどおどし

たマグダの態度と比べると、ある程度の自信も感じられる。マルガリータは秘書と不倫関係にあり、家庭を顧みない夫との離婚手続きを進めるべく弁護士事務所にやってくるのだが、夫と秘書の休暇先であるマヨルカ島のホテル名、電話番号、部屋番号、二人がそれぞれの名前で別々の部屋に泊まっていることなどをすでに調べてきている。また、二人が行ったホテルやレストランの請求書もすでに確認し、アパートを借りていることを突き止めていることからも、マルガリータが行動的な女性であることがわかる。さらに彼女は刑法典を1冊購入し、事前に読んでから弁護士に会いに来ており、明らかにマグダよりも知的な女性である。しかしながら、証拠がないので離婚請求できないという弁護士の専門用語を用いた説明に反駁するほどの知識はマルガリータにはない。「ご主人が遅く帰宅しても、あなたを連れずに気晴らしに行くとしても、あるいは一晩帰ってこなくても、文句を言ってはいけません。様々な約束があるご主人の世界を理解することに努めなさい」という『よき妻の指南書』の規則10に従うならば、妻は夫のアバンチュールを受け入れてしかるべきという考えが当時のスペインにはあったのである。ところで、第二場で注目すべきは妻が経済的に自立していないという点である。夫が家に生活費を入れずに愛人と休暇に出たため、電気代未払いで電気が止められたとマルガリータは語る。彼女は専業主婦であり収入がないことは明らかである。作者ファルコンは『新しいマチスモ』のなかで離婚について以下のように記している。

> 法治国家では女性と子供たちの生活費、住居、衣服、そして未成年者の教育を女性に提供することが必要不可欠である。したがって、離婚は単に女性が拷問を受ける場から逃げることを意味にするだけではなく、夫婦と子供たちの将来の発展にとってきわめて重大な経済的な影響をもたらすのである。そして、それゆえにその影響を最小にするための夫たちの激しい戦いが最初の瞬間から繰り広げられるのだ。(Falcón, 2014, 70)

そしてファルコンは、とりわけスペインでは家族に関する司法権はカトリック教会によって独占され、離婚を許可しない教会法典が唯一の法として効力を持ち、別居を認めることさえほとんどなかったため、女性は諦念と絶望に陥るしかなかったと指摘する(Falcón, 2014, 70)。マルガリータの離婚請求には、教会法に基づいたスペインの伝統的な考え方と離婚後の様々な保障と

いう二つの面での障害がある。

第三場のマリアはカトリックの教えからすれば三人の女性の中で最も堕落した女性であると言えるであろう。彼女は若々しく、「ジーンズとセーターという装いで」、「髪にはパーマをかけていて、化粧はしていない」(165)。ラフで自由な感じのマリアは妻帯者と不倫関係を続けていたが、その男性から捨てられ、精神的に不安定になっている。彼女は不倫関係を楽しむほどに自由恋愛を信奉しているわけではなく、奥さんと別れて彼女と暮らすと言われ、それを信じていたのである。『よき妻の指南書』の規則 10 で見たように、男性には外で気晴らしをする権利、つまり妻以外の女性と関係を持つ権利があるのだ。しかしながら、声だけ聞こえる精神科医の、「そのような乱れた関係は、あなたが未熟な女性で、まだ口唇期を乗り越えていないことの証です」(167) という診断からすると、妻帯者の気晴らしに付き合う女性の方は未熟だとみなされるのである。男性には許されることが女性には許されない社会なのである。マルガリータが経済的に自立していないのとは対照的に、マリアは金銭的に不倫相手に頼ることはない。彼との子供が欲しいのかと聞かれた彼女は次のように答えている。

> マリア　今は欲しくないです、彼には子供が何人もいて、奥さんとその子供達を養わなければならないからです。いつもお金に困っていました。私は自分の分は自分で払わなければなりませんでした……。(167)

マリアは不倫相手の妻や子供たちに対する配慮もし、理解ある女性として振舞っていたのである。彼女は、「いつも奥さんが理解してくれないと文句を言って」いた「彼の世話をして甘えさせてあげ」(167) ていた。つまり、『よき妻の指南書』が言うように、男性の愚痴を聞き、彼が「快適に暮らせるように世話をすること」で、彼女自身が「途方もない個人的満足を与え」られていたのである。マグダやマルガリータに比べると進歩的な女性に見えるマリアであるが、不倫関係にありながらも相手の男性にとって「よき妻」であろうとしていた点からすれば、フランコ時代のイデオロギーに支配されていたと言ってよい。

6. 男性の登場人物と不在の男性

次に、本作に登場する男性を考察していく。第一場の警部はまったく仕事をしない公務員を象徴している。「机の上に用紙が置いてあるが枚数は少なく」、しかも「白紙」であり、「灰皿には吸い殻」があるが、「それ以外は何もない」(147) という舞台設定により、警部が仕事をしていないことは明らかである。「手には印章付きの金の指輪」をはめており、「小指の爪がやけに長い」(147) というト書きからは彼が身なりに気を使っていることがわかる。爪楊枝で爪の掃除をしながら、ラジオでサッカーの試合中継を聴いており、マグダが入室したのに気づきもしない。仕事をしていない警部の様子に、マグダが口ごもりながら、「あなたは……あなたは警察官ですか?」(149) と尋ねる場面は皮肉が利いている。警部にとって、暴力を振るう夫を告訴しに来たという女性は、日曜日の午後のサッカーの試合中継を聴く楽しみを妨害しに来た邪魔者でしかない。そんな折、警察署と同じ建物に入っているレケホ銀行に強盗が押し入ったことを警部補が報告しに来る。二人は次のようなやり取りをする。

> **警部**　(唸り声を上げて) 出動させろ、みんな出動させるんだ!　平の隊員、警部、警部補、警察官みんなだ。
> **警部補**　平の隊員が2名しかいません。それに、警察署で警備に当たっています。
> **警部**　それじゃ、ほとんど仕事をしていない特殊作戦部隊を呼ぶんだ!あいつらが受け取っている特別報酬分の仕事をしてもらおうじゃないか!　そして俺はここで、仕事で疲労困憊して、一人きりで、助けもなく、残業代もなしだ! (153)

警部は緊急事態にパニックになり、対策を考えて指示を出すこともできずに思いついたことを叫ぶ。また、サッカーの試合中継を聴いているだけで何の仕事もしていないという自覚がまったくない警部の口から出るのは不満ばかりである。警察に所属しているというだけで、彼は「命を危険にさらし、犯罪者やテロリスト、泥棒、ホモ、その他もろもろから」国民を「守っている」(153-54) と自負しているが、その働きは有名無実である。

第二場に登場する若い弁護士は仕事をしているという点において、第一場の警部よりはまだましであろう。しかしながら、「常に自分が優位にあるという口調で話す」(157) この弁護士も明らかに女性を下位に見ている。彼は、妻から夫に離婚を請求することを理不尽だと考えている上に、マルガリータが何もわからずに弁護士事務所に来たのではなく、ある程度の証拠も持参して毅然と話をするため、彼女のことを生意気に思ったに違いない。弁護士の説明を見てみよう。

> **弁護士**　(勝ち誇って微笑む) ああ！　良くないな、非常に良くないです。姦通の明白な証拠がありません。(ゆっくり述べる) Adulterii probatum debem esse、姦通は証明されなければならない、ということです。お分かりですか？　以前、(マルガリータが話そうとするが、彼は手で仕草をして彼女を制し、もったいぶった話し方で続ける) 偉大な法学者である賢王アルフォンソ 10 世の時代には、火や水を使った実験と、煮え立った油の神判が罪を証明していました。確かに民主主義的ではないシステムですが、時には効果がありました。ナポレオン法典以降、姦通は、居合わせた目撃者が明白な誓いのもと、性交があったというような意味で証言をする限りにおいて comprobatum est、つまり立証されます。しかし、理解に努めましょう……。(話したがっているマルガリータを制するために再び仕草して) 確実に事実と認められる姦通が存在したとするために必要とされる性交は、完全なる交尾なのです。つまり、完全な射精における精液の放出をともなう男性器の女性器への挿入です。そのような射精の検証には、その場に居合わせて即座に目で見ることは必要とされず、染みが付いたばかりのシーツや女性器の検査のような外から見て十分と言える印でこと足りるということを理解しましょう。ベッドの上で男女が全裸で官能的に抱き合っているところを見つけた場合には、です。でも、どうでしょう、そういった形跡すらないのに、どうやってしかるべき証拠を提示できるのですか？ (161)

彼はラテン語や専門用語を使い、あえて説明を難しくして、自分が彼女の優位に立つ弁護士であることを誇示するのである。しかも、マルガリータが刑法典を購入して勉強してきたことを知ると、弁護士は向きになって怒る。「それじゃあ扉にプレートをつけて、他の人たちへの助言を始めたらどうで

すか？」（161）と嫌味を言い、「素人に刑法典を売るのを禁止すべき」（161）だとさえ言う。しかしながら、偉そうにマルガリータを説き伏せる弁護士が一瞬不安を感じる場面がある。マルガリータが前日に警察署に行ったと伝えると、弁護士は眉をひそめて、多少不安な様子を見せるのである。その後のやりとりを見てみよう。

> **マルガリータ**　（ほとんど声にならない声で）告訴を受け入れようとしてくれませんでした。警察署長に、それは馬鹿げたことだと言われました。そのうち主人は戻ってくるから、それまでに家を掃除して主人のために美味しいご飯を用意しておくようにと言われました。疲れて帰ってくるだろうからと……。
> **弁護士**　（安堵のため息をつく。落ち着いた、自信のある態度を取り戻す）的確な助言です。いつだって美味しいシチューを前にすれば苦労は和らぎます。もしあなたが献身的に家事に従事し、ご主人を取り戻すことに専念するなら、間違いなくご主人はあなたの元へ戻ってくるでしょう、しかるべくして……。（163）

警察もマルガリータの訴えを真剣に聞くことはなかったと知り、弁護士は後ろ盾を得たと思ったに違いない。警察も弁護士も『よき妻の指南書』の規則1の「おいしい夕飯を準備」することが夫婦円満の秘訣であるということで意見が一致したのである。

第三場では、精神科医は姿を見せず、声だけの登場となる。マグダは警部と、マルガリータは弁護士と対面して敗北を帰すのであるが、先述したように、マリアに至っては直接にやり取りすることさえ許されない。この精神科医も弁護士同様に素人にわかりにくい専門用語を用いて説明する。フロイトの理論である口唇期、エディプスコンプレックス、イオカステのコンプレックス、メディアといった語を用いた医師の言葉はマリアにとって何の治療にもなっていない。精神科医の声は個性も抑揚もなく機械的である。支払いはポストに紙幣を入れると紙幣が吸い込まれる仕組みになっている。そして時間が来ればインターフォン越しの声が診察の終わりを告げ、電話が切れる。この診療は患者に対する配慮などなく、きわめて事務的、かつ冷淡な対応である。第一場では警察、第二場では法曹界の大きな権力が女性を虐げる様が示されたが、第三場では医療の場における女性蔑視というよりは女性に対す

る不可視の権力、不可視の拒絶、不可視の非人間的扱いが描かれているのである。

不可視と言えば、マグダの夫、マルガリータの夫、そしてマリアの愛人は誰一人として登場しない。男性たちの不在は女性との対話の欠如を示唆していると言える。マグダの夫は暴力で妻を押さえ込み、おそらく夫婦で対話をすることはないであろう。マルガリータの夫にしても、彼女の言うように秘書との逢引のためにアパートを借りているならば、家にいて夫婦で会話をする機会はほとんどないと思われる。そして、マリアの不倫相手は別れる理由を彼女に告げることもせずに、アパートを入居したときと同じ状態にして出て行くようにと書いた置手紙を残して彼女を追い出す。この二人にも対話が欠如しているのである。

姿を現さない男性たちは当時の男性優位の社会を象徴しているとも言える。妻に暴力を振るい、子供の育児に無関心で、別の女性との情事を楽しみ、愛人の存在に耐えることを妻に求め、愛人にもよき妻として振舞うことを要求し、飽きれば別の愛人を作る、そのような男性を容認する社会という目には見えない構造とイデオロギーが不在の男性たちによって示されているのである。

7. 連帯しない女性たち

第一場、二場、三場で別々の物語が展開するが、それぞれにつながりがある。第一場の最後、マグダが泣きながら警察署を出る時にマルガリータが入って来る。「彼女は退場するマグダとぶつかりそうになる。彼女たちはお互いを見て、遠慮がちに挨拶する」(155) のである。マルガリータは弁護士事務所に行く前日に警察に相談に行ったのであるから、そのときにマグダとすれ違ったのであろう。警察はマルガリータの告訴を受け入れようとせず、離婚請求を馬鹿げたことだと言い、「そのうち主人は戻ってくるから、それまでに家を掃除して主人のために美味しいご飯を用意しておくようにと言」っ(163) たのである。女性たちは単独で警察に訴えに行くが、無視されたり説得されたりして訴えを諦めなければならない。非力な女性が個人で闘っても到底勝ち目はないのである。

第三場の最後に三名の女性が舞台に登場する。幕が下りる直前のト書きを見てみよう。

マリアは何も理解できず、電話を見つめる。受話器を置き、電話ボックスの扉の方へ一歩踏み出す。その瞬間、マグダが到着する。二人の目が合うと、マリアは道を譲りマグダを扉の方へ通す。マグダがベルを押すと、声が聞こえる。「もしもし？」幕が素早く下り、マリアだけが前舞台にいる。彼女は下手舞台袖にゆっくりと向かい、退場する。舞台にマルガリータが登場し、扉の方へ向かい、呼び鈴を鳴らす。(169)

この ト書きが示すのは、マグダもマルガリータも精神的に追い込まれ、精神科医のセラピーが必要になっているということである。研究者ガブリエルは本作の最後に三人の女性が精神科医の診療所の外に登場することは特に重要だと指摘している。「正義を求めて必要な手順を踏んでいるにもかかわらず－マリア同様－マグダとマルガリータは解決策を見つけられないことに失望し、うつ状態になるのだが、それはファルコンによれば、援助や代案を求めて公的機関に訴える女性を待ち受ける状況なのである」(Gabriele, 1997, 49)。後に来た2人も、マリアと同じように医師と直接面談することもなく、機械的な声でよくわからない説明を聞かされ、お金だけ取られてすごすごと帰ることになるのだ。この最後の場面でも、同様の悩みを抱えた女性たちがそれぞれ単独で行動し、連帯していないことが示される。女性たちが悩みを共有し連帯することで初めて、男性優位の社会を変えていくことができるのに、なぜ連帯しないのか。女性へのそのような呼びかけが聞こえてくるのである。

8. おわりに

ファルコンの『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』は三人の女性を登場させ、フランコの独裁制が終焉した後も依然として女性の自由を認めないスペイン社会を戯画的に描いている。ナンシー・ヴォスバーグ（Nancy Vosburg）が指摘するように、政治的な移行に伴い進歩したように見えながら、スペインの特性や生活様式は公私ともにほとんど変わらなかったとファルコンは主張している（Vosburg, 1998, 199)。2005年に実際に起きた事件に基づいてファルコンが執筆した『虚偽の告訴』のイントロダクションで彼女は以下のように語っている。

演劇は現実を提示するのみならず、その現実の悪を告発するのに相応しいのであり、一番の弱者に対する不公平や冷酷な対応が支配する世界を劇化することによって、そのような不公平を庇護する社会における意識を目覚めさせることに寄与できる。そして皮肉や風刺は、様々な差異を増やす力を与えながら、そのような現実のパロディを創作するのに役立つ材料となる。だから私は女性に対して犯され続けている不正行為を告発するために、かつ『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』のような以前の作品と同じ路線を行くフェミニズム演劇を創作するために、虚偽の告発を題材にした。そして、意識を覚醒させ、不正を訴え、この世界をよりよくするために私の書いてきた作品が役立つことを望んでいる。 (Falcón, 2006, 133)

『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払いください！』が発表された1984年から『虚偽の告訴』が執筆された2005年まで20年が経過したにもかかわらず、スペインにおける女性を取り巻く状況はあまり変化しなかったということになろう。しかしながら、近年の国際女性デー（3月8日）にスペイン全土で行われる大規模なデモ行進や、2018年に発足したペドロ・サンチェス内閣で多数の女性が大臣に起用されたことなどを見ると、女性の声が取り上げられるようになったことは確実である。何十年にも及ぶリディア・ファルコンからの「連帯せよ」との呼びかけに女性たちが応えた結果ではないだろうか。

参考文献

Falcón, Lidia. (1998) *¡No moleste, calle y pague, señora!,* en Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres : teatro breve español,* Madrid : Editorial Fundamentos, pp.145-169.

————. (2006) "Introducción de la autora" en Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres : en los albores del siglo XXI : Teatro breve español,* Madrid : Editorial Fundamentos, pp.131-133.

————. (2014) *Los nuevos machismos,* Barcelona : Editorial Aresta.

Gabriele, John, P. (1997) "Hacia una dramaturgia femnista española", *El teatro breve de Lidia Falcón,* Madrid : Editorial Fundamentos, pp.31-83.

————. (2002) "Prefacio", *Lidia Falcón : Teatro feminista,* Madrid : Editorial Funda-

mentos, pp.7-9.

O'Connor, Patricia W. (1998) "Introducción" en Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres : teatro breve español,* Madrid : Editorial Fundamentos, pp.11-16.

————. (2006) "Comentario" en Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres : en los albores del siglo XXI : Teatro breve español*, Madrid : Editorial Fundamentos, pp.145-146.

Vosburg, Nancy. (1998) "On Post-Transition Politics, *Picardía,* and Power – Lidia Falcón's *El alboroto español*", Kathleen M. Glenn and Mercedes Mazquiarán de Rodríguez (Ed.) *Spanish Women Writers and the Essay,* Columbia : University of Missouri Press, pp.198-211.

インターネット資料

Guía de la buena esposa

http : //www.rehueong.com.ar/sites/default/files/Gu%C3%ADa%20de%20la%20buena%20esposa.pdf（最終閲覧日 18-2-2020）